

月刊 秘伝

武道・武術の秘伝に迫る

THE HIDDEN
BUDO & BUJUTSU

11

2003.NOV.

2003年11月1日発行(毎月1日1回発行) 通巻182号
1996年6月27日 第3種郵便物認可

【現代抜刀道の父】の後ろ姿
武道に生涯を捧げた漢
大往生・中村泰三郎

待望、新連載!!
小山一夫師が明かすヨーガの秘法
「火の呼吸」で覚醒する
ヨーガ式発勁とヨーガ式合気

特集

古流剣術が辿り着いた武の最高峰

白兵戦の剣理を読む

line-up

香取神道流 小野派一刀流 柳生新陰流 兵法二天一流

The Highest Points In
"KORYU-KENJUTSU"
多敵之位。

KATORI-SHINTORYU

香取神道流。

天真正伝香取神道流師範・大竹利典

The Highest Points In “KORYU-KENJUTSU”

戦国のリアリズムが生んだ 平法という生き方。

第一部にて取り上げるのは
天真正伝香取神道流——言わずと知れた
古流剣術の源流である。室町戦国の時代、
白兵戦の中に興った同流に古流剣術の
原初形態を訪ねる——。

文・本誌編集部 text “HIDEN”



香取神宮近く木部道場に奉られる流祖・飯笹長威斎とその妻

飯笹長威斎家直が創流した天真正伝香取神道流は、流儀武術としての体裁を整えた最初の流派と考えられ、後の武芸諸流派に大きな影響を与えたと考えられる。その技法は剣術にとどまらず、居合術、薙刀術、槍術、柔術、手裏剣術から築城法、忍術、法術を含む、いわゆる武芸十八般の膨大な体系を伝えている。「日本の古武道」横瀬知行著

以下、香取神宮近く千葉県成田の「神武館」において天真正伝香取神道流（以下、香取神道流、神道流）を教伝している大竹利典師範よりお話を伺った——。

読者は、「古流剣術」というとどんな戦闘場面を想定されるだろう

うか。人間は自ら見たことのないモノに対しては、ほとんどその正確なイメージを描くことは難しい。香取神道流が生まれた時代の「古流剣術」とはいかなるモノであったのか？ まずは、そこから話を始めなければならぬ。

「例えば、居合というの本来、夜襲に対応するために作られたものなのです。闇の中では視点を低いところに持つていく方が格段に視界が広がる、という人間の目の特性を活かした技術が居合であり、昼間であったなら、あえて刀を納めたまま低い「居合腰」を作る必要はないわけで、初めから抜刀して立ち向かえば良いわけです」

夜襲への対応、これが神道流における居合のテーマである。それ故、神道流では他流のように正座



多敵之位「三人斬り」

常に白兵戦を想定する神道流では、相手に囲まれるような状況は例外となる。しかし、もしも三人の敵に囲まれてしまった場合は、こう対処する――。



夜襲に対する香取
神道流の居合を示
す大竹利典師範

から抜刀することはない。それは殿中で刀を抜くことはないからである。夜襲という白兵戦では日常茶飯事の事態から自然発生的に生まれた技術、それが神道流の居合である。それは当然のこととして多敵への対応を想定している――。

夜襲にあったとき、神道流では即座に独特の居合腰をとる。「神道流の居合腰」というのは、この体勢から右へも左へも瞬時に飛び移ることが出来るわけで、刀がキラリと見えたときにはすでに相手を斬っていないはずなりません。そして斬った後はすぐに低い体勢になり、次の敵に備えるのです」

ここで改めて注意していただきたいのは、神道流では、特別な状態としてではなく、常の兵法として多敵を想定していることである。それ故、一度抜いた刀は敵を殲滅しない限り鞘に納められることはない。ここからあの柄を叩く、独特の血振りの意味が表れてくる。「あれでは血が落ちるわけがない」と言われますが、実際あれで血が落ちるわけがありません。しかしそれは通常の血振りも同じです。あれは単なる所作なのであって、実際には敵を殲滅した後、ゆっくりと布で血を拭って納刀すればいいのですから」

ここまで読まれた読者は、その神道流が持つ「必殺仕事人」のような動きや思考、雰囲気と、通常我々が思い描くような剣術のイメージとの乖離に驚かれたかも知れない。そして、そのイメージはさらに崩される。

「神道流には口伝として、自分の周りの空間の闇を濃くする方法が伝えられています。桐の木灰をすりつぶして粉にする。そしてこれを自分の周辺に振り撒きながら移動する。桐の粒子は非常に細かく、空気と一体になり、これによって敵の目からは全く自分を捕らえることが出来なくなります」

これではまるで忍者者である。「その他にも、例えば部屋の中の歩き方にしても、六畳間の場合、十畳間の場合など、歩き方の順序があるわけです。それによって、必ず畳の順目に沿って歩くことが出来る。よって全く音を立てることなく部屋の端から端まで移動することが出来るわけです」

本特集を始めるに当たって読者に理解していただきたい点はこの点にある。常の兵法として多敵が想定されていた時代の「剣術」。そのイメージは江戸以降、道場の立合が主流になった時代の剣術とは全くの別モノなのだ。

「道場ではない、白兵戦の中で生まれた神道流では、このような総合武術としての形態があるのは当然のことなのです」

正面と左右を斬る 神道流の「多敵之位」

常に白兵戦を想定する神道流では、相手に囲まれるような状況は例外となる。そうならないために膨大な戦術、戦略の体系があるのだから。しかしもしものことも考えられませんか？とあえて喰らい

付くと「例えば神道流の伝書の中には、正面と左右の三人の敵に対処する場合の技術について書かれたモノがあります」とのこと。

「複数の敵を相手にする場合、まず大前提として、前後左右を囲まれてしまつてはどうしようもないわけで、自分の背後に回り込まれることのないようにそれぞれの相手に気を配りながら、それぞれの相手との間合を計ります。この時、多少後方へ下がりがりながら間合を計ることが重要になります」

一太刀目——「まずは自分の右側に位置する相手から片づけるわけですが、これは視野の問題で、右手前に構えているとどうしても右側面の視野が狭くなるからです。この一太刀目は相手が低く構えている場合は、刀で受けたとしても、その上から斬りつけてしまう。もしくは相手が高く構えている場合は、右足を引きながら脛を払い斬る。何はともあれ確実に絶対に仕留めることが重要です」

二太刀目——「そして二太刀目は左の敵です。これは斬り下ろした、あるいは脛を払った一太刀目をそのままに、下段から斬りつけることが重要です。これは神道流の目録の『位付秘伝』という項目にあるわけですが、基本的に構えは下段が一番有利になります。相打であれば確実に下段が勝つ。自分の刀を相手の刀の下に入れてしまえば、相手より後に斬り込んでもこちらの刀が勝ちます。ですから

この二太刀目は、相手より斬り込みが遅れたとしても勝つことが出来るので、逆に、一太刀目を十分に極めることが出来るわけです」

最後に——「あとは残った正面の敵ですが、ここまでして向かってくる人間はいませんよ。サッサと逃げるのが普通です（笑）」

非公開の“崩し” その隠された技法

「神道流では常の兵法が多敵を想定しているため、多敵に対応するための型というのは、特別には存在しません。それは、実戦では相手が斬り込んできたのに対してこちらも斬り込んでいく、それしかないからです。先ほどの多敵への対応を見ても分かるように全ては一瞬で決まってしまうんです。受けるのではなく斬り込んでいく。そうやって動ける体を作ることが神道流の型稽古なのです」

——ここで少し香取神道流の型について触れておきたい。
神道流の型は、例えば「表之太刀」と呼ばれる介者剣術の型は、「双方互いに太刀を打ち込み、払い、攻防を行っていく。それは他流の組太刀の数倍以上の手数であり、非常に長い型」（前述「日本の古武道」）である。
「確かに神道流の型は、極まり手がなく、手数が非常に多いので、一見するとチャンバラをやっているようにも見えます。これは戦国時代の剣術はみなそうだったと思



流神道香取正真
家修徳
亮宗家(右)と
師範大竹(左)

The Highest Points In “KORYU-KENJUTSU” 白兵戦の剣理を読む—— 多敵之位。

うのですが、相手に手の内を読まれないために、稽古は徹底的に秘密主義だったことによります。実は、これらの型は他流に見られてもいい一般稽古用の型で、実際には、これまで神道流では殆ど外部には見せてこなかった『崩し』という上級稽古があります」

——この「崩し」とは、入門してから最低3年以上経った門人に教伝されるもので、一般稽古用の型の裏に隠された極まり手を稽古するものだという。その極まり手の中には、多敵への対応で紹介していた『位付秘伝』など神道流の様々な理合が含まれていて、それを一つひとつ学んでいくらしい。「ですからあの一般稽古用のチャンバラのような型の中でも、実際には何度も相手を斬り、相手に斬られているのです」

本来、神道流では手首や頸動脈など鐘の隙間の急所を狙うので基本的に大きな動きはしません。しかし、その分だけ失敗はすぐに分かかってしまいます。神道流の型では、実際には、『切込み』（打太刀）と『受太刀』（仕太刀）の間で針の穴を通すような攻防が繰り返されているのです」

確かに、「崩し」を想定して神道流の型を見ると、失敗して斬られる瞬間や双方の力量が素人目にも非常に浮き彫りになる。
神道流では「受ける暇があったら斬れ」という教えがあるというが、上級者同士の型では、両者共に受けた瞬間に攻撃しているため、全く息を付く暇もない。

「どんなに鍛えた人間でも動脈を斬られれば1分と生きていたことはできません。そこには体が大きい小さい、力が強い弱いなどという因子は介在しません」

神道流は徹底して理合なのです。考える必要はない、高邁な思想もいらぬ、神道流の理合通りに動けばいいわけです。私は門人に対してよく言うのですが、稽古しているときに明日の仕事のことを考えながらも体が動かなければならないのです」

しかし、これを逆に考えると、その理合を読まれることは徹底して避けられるべきで、神道流で一般稽古用の極まり手を隠した型が作られたことも頷けるわけである。

600年の歴史と 平法というリアリズム

このように徹底したリアリズムを追求する香取神道流であるが、その古流武術最古600年の歴史の中で一度として試合ったことがないというのは驚きである。

「神道流には、流祖・飯笹長威斎先生の時代より他流試合は厳禁とされてきました」という大竹師範。そうは言っても香取の名は全国に知れ渡っており、多くの他流試合の申込みがあったはずである。そんなときはどうしたのか？
「神道流には『熊笹の教え』というものがあつた。これは流祖・長威斎先生が他流試合を申し込まれたときのエピソードに基づく教えで、その時長威斎先生は、自分

神道流の“戦後”

元々、戦後日本において古流武術の価値が正当に認められたことは殆どなく、現在の日本人の意識が「戦後」である限りこれから先も望みは薄い。

以下、昭和35年、香取神道流が千葉県の指定無形文化財になった。その時のエピソードである。

「当時、香取神道流の技術的道統は、香取の地に留まった林弥左衛門先生と東京にて教伝を試みた椎名市蔵先生という二つの流れを作っていました（これらの内、前者の道統は大竹師範へ、後者は杉野嘉男師範から杉野至寛師範へと受け継がれる）。それぞれが何とかして古流武術の復権を考えた末の選択だったでしょう」と当時を振り返る大竹利典師範。

そして前者の、香取の地に地盤を築こうとした林弥左衛門師範等が最重要の課題としたのが、香取神道流を県の無形文化財として認めさせることであった。

「しかし当時の古流武術に対する風当たりは今以上に厳しいもので、『香取神道流？ 古流武術？ それは剣道より強いのか？ それなら実際に立ち会わせてみよう』と

いうのが県の答えでした」

結局、相手の剣道若手五段に対するのは、当時の神道流における年齢、実力、経験を考慮して自然「大竹しかないだろう」ということになった。他流試合を厳禁としてきた香取神道流では、600年の歴史上初めてのことである。

「まず最初に考えたことは、これはエライ事になった、ということでした。もし負けた場合は、とても流祖以下先達に顔向けが出来ない。そうなると……本当に腹を切るしかない。そんな心持ちでした」負ければ「腹を切る」とは裏を返せば絶対に負けられないということである。

「色々対策は考えました。まず相手が防具を着けるのは良いが、自分は素面素小手、木刀は短めで軽い物の方が良いだろう。ということとで知り合いに頼んで特注の木刀を造ってもらいました。そして毎晩立木に向かって打ち込みを行っていたわけです」

——結局、この立合は林弥左衛門師範の絶妙な調停によって事なきを得る。県の役人の間にも顔が利いた林師範は「うちの若い門人が生きるか死ぬかと毎晩木刀を振り回しているが、これでは死にはしないまでも、どちらかが大怪我を

“孝”が支えた伝承のシステム。

遠く室町の時代より途切れることなく伝承されてきた
日本最古の古流剣術、天真正伝香取神道流の近代史を読む——。

文・本誌編集部 text “HIDEN”

今回紹介したエピソードの時に使われた
大竹師範の木刀

することに。あなた達はそこまでの覚悟があるのですか」と県の役人に持ちかけたらしい。

その直後、天真正伝香取神道流は、古流武術では日本で最初の指定無形文化財となった。

古流武術と“孝”

さて、この時に調停役をした香取神道流・林弥左衛門家清師範（昭和39年死去）について、ここで少し触れておきたい。

林師範は初め林作一郎師範に神道流を学ぶが、その後、東京で會計の仕事に就く。戦前の話である。持ち前の努力によって会社での信頼を得て役職も上がっていったが、そこにある種の違和感を感じていた林師範は、結局、香取の地に戻り、農業を営みながら神道流の稽古に没頭する。それは、仕事が終わった後自転車で数時間の道のりを通い、稽古の後、また数時間道のりを行くという非常に厳しいものであった。

大竹師範は師・林弥左衛門師範についてこう語る。

「非常に温厚な人柄で多くの門人に慕われていました。やはり自分がそれだけの苦勞をしたからこそ、人の痛みが分かったのでしょう」

そして戦後の困難期にこの林師範と共に香取神道流を支えてきたのが第二十代・飯笹修理亮快貞宗家である。香取神道流では、代々宗家は飯笹家が継いでおり、飯笹快貞宗家は現在も香取神宮近くに居を構え、300年の歴史を伝える香取神道流の本部道場を管理しておられる。

「結局、香取神道流は多くの先達の、そして現宗家の努力があったからこそ今に残ることができたのです。私は本当に香取神道流に出会えて良かった。この“孝”の精神が私を支えてくれたのです。

あの時もそうです。数え切れないほど多くの人々が神道流を残してきた。それ程の価値あるものを背負う責任、義務を感じられたことは私の一生にとって非常に幸せでした。神道流に出会い、神道流と共に生きてこられたからこそ私は自分の人生に誇りが持てる。

そんな私が今の日本人に望むことは、何でも良い、何かに向かって一生懸命になり、誇りある悔いのない人生を歩んでもらいたい、ということですよ」

——古流武術は日本文化の根幹を成す「大黒柱」である、と言ったなら多くの日本人の方々はどのよう感じられるだろうか。⊕



表之太刀一本目「五津之太刀」

「表之太刀」は介者剣術の型であり、
「双方互いに太刀を打ち込み、払い、攻防を行っていく。
それは他流の組太刀の数倍以上の手数であり、
非常に長い型」(『日本の古武道』)である——。



崩し

「切込み」が相手の
鎧の隙間に突き込む
五津之太刀「崩し」
一本目(左)と「位
付秘伝」の理合(下)



五津之太刀“崩し”「位付秘伝」

基本的に構えは下段が一番有利である。
相打であれば確実に下段が勝つ。
自分の刀を相手の刀の下に入れてしまえば、
相手より後に斬り込んでも、
こちらの刀が勝つのである——。



相手の太刀を見切ると
きは「我が身を六寸と
思え」と教えるという

が座っていた熊笹のゴザを相手に
勧める。「これに座ることが出来
たならあなたと立ち合いますよ
う」と。しかし相手は驚いてしま
うわけです。なぜならその熊笹は
先生が座っていたにもかかわらず
葉が全く折れていない。桁違いの
実力に相手は戦わずして負けを認
めてしまわうわけです」

正に剣術で言う「位勝ち」であ
る。結局、徹底してその技術性を
追求した結果、神道流は「ブラッ
マティックな非戦主義」「「平法」
という独自の思想をつくり上げた。
「これは単純な非戦主義ではあり
ません。それは、相手と戦う必要
がないくらいに技を磨けという教
えなのです。代々の神道流のトッ
プには、常にそこまで技を磨かな
ければならないという使命が与え
られたわけで、それが守られたこ
とは、今だに神道流の技が完全に
近い形で残っていることが証して
います」

確かに日本最古の流儀である
香取神道流がその総合武術として
の技法体系をほぼ完全な形で残し
ていることは、現在の古流武術の
保存状況を鑑みれば奇跡に近い。
「これに比べれば戦うことは簡単
だったわけです。しかしそれをや
ってしまっただけは現在の神道流はな
かったのではないのでしょうか。

そう考えると流祖・長威齋先生
の位の高さには本当に驚かされま
す。結局、600年前前に考え出さ
れた先生の思想がこれまでの神道
流を支えてきたわけで、これから
も支えていくのですから」